

速音読再び

さて、2021年発行の「セミナー通信 vol.315」で紹介させていただきました「速音読」の実践を、今年になってまた挑戦する塾生が出始めました。やりたい旨を私に言ってきたのです。現中3クラス生が小6の時に、全塾生で実践していた、齋藤孝さんの「楽しみながら1分で脳を鍛える速音読」ドリル。名作文学のクライマックスや冒頭を「見開き1分で読む」というチャレンジを、授業前後の空き時間に一人ずつ私の前で挑戦していたものです。約半年間続けましたが、実はかなりの効果を実感できていました。読み速度が遅く、模試の国語の文章を読むのに四苦八苦していた中2の子が半年間一生懸命練習した結果、読みスピードが格段に上がり、最終的には入試でも国語は8割以上の点数を取ることができたのです。本人も「速音読練習で読む力がアップしました。」と言っています。みんなにやらせてみての私の実感は、「音読がすらすらできる子は国語力が高い。」、逆に「音読がすらすらできない子は国語力が低い。」です。当たり前の事ようですが、かなりの相関性を実感しました。特に、“読めない子で国語力が高い”子は塾生では皆無でした。すらすら読めるようになれば国語力がアップするとは100%言い切れないかもしれませんが、読めないことには話は始まりません。

これまで素読（意味を重視せずに音読すること）による脳機能アップの実証データをたくさん取ってこられた脳トレの第一人者、川島隆太さんは、速く読むことで頭の回転速度が上がり、毎日やっていると脳が作り替えられるという事が見えてきたと仰っています。記憶力が2割ほど増す状態になるほか、思考や記憶を司る脳の前頭前野の両側の体積が、MRIで見て分かるほど劇的に増えることが確認されているそうです。素読を速くやることは、20歳以上の人にとっては脳の機能（回転速度と記憶の容量）の低下を食い止められ、子ども達の場合は発達期に脳の器が大きくなると仰います。また、ドリルの筆者である長年速音読指導をされてきた齋藤孝さんは、速音読は決して文学の味わいを損なうものではないと仰います。速く正確に流れよく読むために、頭は必死に内容をつかもうとし、次はどうなるのだろう、次の文章はどういうイントネーションになるのだろうと、脳がフル回転するのだそうです。

今挑戦している子の一人は、小6の時にこの速音読が苦手で、あまり自分からやろうとしなかった子でした。中3になり本気で取り組みはじめ、驚くほど力を伸ばしてきています。上記ドリルを購入されてご家族みんなで楽しみながら挑戦されることが一番のお勧めですが、塾でも1ページずつお貸しできますので、気になる方はお声がけ下さいね。